

第14回 会長の時間 地区大会報告 H28.11.10.

10月29日～30日にわたり、広島で地区大会がありました。皆様、お疲れ様でした。本日の卓話のテーマは、「地区大会報告」ですので、本日は、第1日目に広島リーガロイヤルホテルで開催されました会長・幹事会を中心にお話しします。当日は、新幹線で広島に到着しましたが、この日は、日本シリーズ第6戦が広島で開催される日で、フードフェスタやJリーグの試合もあり、広島市内は大変混雑していました。

広島リーガロイヤルホテルで受付をすませ、午後2時から会長幹事会が開催されました。ガバナー、RI会長代理の挨拶に続いて、クラブ表彰がありました。わがクラブは、米山記念奨学会個人平均寄付額賞の第3位でしたのでクラブの名前を呼ばれました。ちなみにこの賞の第1位は宇部東RCで、コンラドペーターさんが、壇上に上がり表彰状を授与されました。また、個人の部で49年100%出席者として吉村亨様が賞を受けられましたことは、わがクラブの誇りです。おめでとうございます。そして、基調講演は、日本対がん協会会長の垣添忠生先生が「人はがんとどう向き合うか？」というタイトルで話されました。垣添先生は、東京大学医学部泌尿器科から国立がんセンターの院長さらに総長をされた著名な先生です。先生は、自らも早期の大腸癌と腎癌に罹患されて治療を受けられておりますが、奥さんを肺がん（小細胞癌）で亡くされた体験を話されました。自分の病院で、抗がん剤と放射線による治療をされましたが、脳、肺、肝臓、副腎への転移が判明し、奥さんが以前から希望されていた在宅で最期を看取られたそうです。奥さんが亡くなられてからは、仕事の時間以外は、話し相手がないため、寂しさを紛らわすため、大量に酒を飲み、食事もあり取らなかったため、体重が激減されました。そして3か月を過ぎた頃に、ようやく少し上向きの気持ちが出てきたそうです。仏教でいう百箇日はよく考えられている法要だと自ら感じたと話されました。こんな今の自分の状態を、妻は決して喜んではいないだろうと自問し、今後は一人で生きていかねばならないと決心して健康にも務めるようになり、二人の趣味だった登山とカヌーも、一人で再開したそうです。いつも私のそばに妻がいてくれると感じ、何も怖いことがなくなると語られました。がんの専門医でありながら最愛の人を救えなかった無力感と喪失感そしてその絶望の淵からいかにして立ち直ったのか、心の軌跡を体験記として、本にまとめられ、「妻を看取る日」というタイトルで出版されました。この本の内容を題材にして、NHKが「ドキュメンタリードラマ」として放送したそうです。垣添先生は、大変多忙な方で、この基調講演の後、パリに出発されました。

続いて、RI 会長代理黒田正宏様の挨拶がありました。黒田様は、弘前大学医学部の出身で、八戸市で黒田内科胃腸科医院開業されておられ、八戸南 RC の所属です。黒田 RI 会長代理は、まず RI 発行の職業奉仕入門を熟読するよう言われました。そして、2016 年度の規定審議会の経緯について説明があり、クラブの自主性と柔軟性が認められるようになったので、クラブ細則を作成したクラブは、それ相応の責任を持つべきだと主張され、これからは、多様性を重んじ、寛容の心で活気ある奉仕プログラムを実践して欲しいと述べられました。さらに、ロータリーと CSR について説明されました。CSR とは、いわゆる企業の社会的責任 (corporate social responsibility) のことで、企業が倫理的観点から事業活動を通じて、自主的に社会に貢献する責任のことです。企業の行動は利益追求だけでなく多岐にわたるため、企業市民という考え方も CSR の一環とされています。黒田 RI 代理は、最近では特にインドがこの CSR 活動に積極的で、文献によるとインドの新会社法で CSR 義務化が施行され、この新会社法では、一定の売上基準を満たす企業に対して直前の 3 会計年度における平均純利益の 2%以上を CSR 活動に支出することが義務付けられているそうです。この講演の後に、RI 会長代理ご夫妻の歓迎晩餐会が開催されましたが、韓国の第 3690 地区総裁一行のバスの到着が遅れ、乾杯が遅れたことが残念でした。

以上で地区大会 1 日目のお話をしました。大会 2 日目のお話は、加藤さん、芥川さん、曹君からたっぷり聞けるとおもいます。これで会長の時間を終わります。ありがとうございました。